

奈良県と兵庫県の天理教

これまで32回にわたって日本国内と海外への伝道を述べてきたが、奈良と兵庫についてほとんど触れていない。伝道経路が複雑であるという理由で先延ばしにしてきた。申し訳ないことながら今回書かせて頂く。奈良県については本連載第2回「教祖ご在世時代」で少し触れたのでその続きである。

現在、奈良県内には679の教会がある(立教177年6月)。県別教会数は大阪が一番多く、兵庫、東京と続き、以下北海道、愛知、奈良である。奈良は本教の地元であり教会が多いのは当然であろう。しかし、県の規模は様々で同等に考えることはできない。そこで人口に対する教会数を考えると分かりやすい。人口10万人あたりの教会数では奈良が最も多く48カ所である。人口10万人の都市と言えば身近な町を想像しやすい。奈良県にはおしなべて10万人の都市に48もの教会があることになる。

具体的に考えてみよう。奈良県には大教会が17ある。そのうち、最初からおやしき(教会本部)につながっていた大教会は郡山、敷島、城法、治道、旭日、桜井、梅谷、奈良、平安、八木であり、中和(郡山)、明和(敷島)、岡(敷島)、上之郷(城法)、生駒(郡山)、五条(桜井)、秋津(敷島)はそれぞれ()内に記した教会から分離した大教会である。といっても、ほとんどが教会制度が始まる前からの信仰であり、多かれ少なかれ教祖から教えを受けて始まった所である。

ところで17カ所もの大教会があれば奈良県内にはもっと多くの教会があつていい。しかし、700に満たないのは何故なのか。面積がさほど広くなく、また人口もそれほど多くないことが一つの理由だろう。しかし、なお別の理由も考えられる。それは大雑把なとらえ方だが17の大教会が布教拠点となって奈良県外に多くの部内教会を有するようになったからだろう。

奈良県で最も多くの教会を有しているのは敷島大教会で、城法大教会、桜井大教会が続く。もちろん3大教会とも奈良県の教会である。ちなみに県679カ所の教会の内、奈良県の大教会に所属しているのが540カ所で約8割にのぼる。当然のことであろうが、これが奈良県の特徴である。すなわち、教会本部地元の県であるから他県からの伝道は少ない。本教の歴史上、奈良県内では早く伝道(おたすけ)が始まり、県外へと伸びて行った。したがって逆に県外から奈良県への伝道例はきわめて少ない。県外大教会所属の教会も140近くあるが、これらも多くは奈良県へ伝道しようという意志を持っての布教ではなかったと考える。

なお、奈良県北部には旭日大教会所属教会が最も多く、城法、治道が続く。一方、県南部は敷島大教会の教会が圧倒的に多く、桜井、明和、城法が続いている。

兵庫県への伝道は、大まかに言うと3方向から入っている。一つは大阪から、もう一つは徳島から、さらに京都府からの伝道もある。大阪と徳島からの伝道を中心に書いてみよう。

大阪は奈良に次いで早くから天理教信仰が広まった所である。そのうち、真明組(芦津系)の伝道が府県境を越え、兵庫県に入った。

明治14年(1881)頃、現神戸市兵庫区今出在家町の魚田やすは噂に聞いた天理王命の神様に娘の眼病を助けて貰いたいと、大阪九条の立花善助を訪ねる。立花は前年真明組に加入し

ていた。

立花の真剣なお願ひにより娘を助けられた魚田は今出在家町や隣町の和田崎町にお道の有り難さを触れて回った。和田崎町では唄こふじが熱心になり、自宅周辺に匂いをかけ、逆瀬川町の端田久吉らに伝えた。端田は後に兵庫真明講社第一号を結成、富屋町の富田伝次郎を入信させた。このようにして1年ほどの間に現在の兵庫区一帯に信仰者が増えた。

さらに富田は元町や三宮など神戸の中心地に伝え、明治16、17年には後の兵神大教会の中心的メンバーとなる清水与之助、増野正兵衛らが入信する。また唄こふじにより垂水の山田荘に伝えられ、山田真明組が結成され、現在の舞子分教会となる。

富田の入信により三木に住む実母藤村じゅんも信仰を始め、三木真明組となり、さらに三木の北方、山間部へ伸びていく。これらは現在の三木分教会をはじめ社大教会、神崎大教会、中吉川分教会、加西分教会、加東分教会などに発展する。

江戸時代の後期ころまで、神戸や兵庫は大きな町ではなく、村々が点在するだけだった。しかし幕末、神戸に幕府海軍操練所ができ、兵庫が開港されると次第に発展する。特に大阪との結びつきが強く、この関係から早く道がついたと言えよう。

教会制度が始まった明治21年に兵神分教会(現大教会)が設立され、上記の神明組各講社は清水与之助の指導のもと阪神間はもとより播州、丹波、但馬の村々へ水が浸透するようにおたすけ活動を広めていく。現在、阪神間、播州、丹波には兵神系統の教会が多い。

現在の飾東大教会、豊岡大教会、生野大教会、網干大教会は教会系統で言えばそれぞれ兵神、北、北、飾東の各教会から伝道されたように見えるが、最初のきっかけは徳島県撫養の信仰者で藍玉商人の正木国蔵がもたらしたものだ。

明治16年と17年は近畿一円干ばつのため兵庫県各地の紺屋たちは徳島から藍玉を仕入れることとし、正木が取引のためやって来た。正木は明治16年に入信したので17年には商売とともにおたすけをした。この時、正木に助けられ入信したのが飾磨の紺谷久平、湯村の木岡儀八郎、照来村丹土の田淵広七、葦東郡の岡部吉兵衛らである。

正木はこれらの人たちに徳島へ来るのは大変だからと、それぞれ神戸や大阪の講元に指導を仰ぐよう諭した。よって、紺谷は兵庫真明組につき、木岡と田淵は天地組(北大教会)から布教師に来て貰った。岡部も真明組の傘下に入り、それぞれ現在の飾東大教会、豊岡大教会、生野大教会、網干大教会になる。

正木の伝道は明治16年から18年にかけてであり、しかも徳島から来訪した時だけのおたすけだった。時間的には短かったがよくこれだけの成果があがったものだ。なお、田淵が天地組の布教師来援を乞い衣川弥兵衛が派遣されたが、衣川の話に感心し入信したのが田川寅吉で生野大教会の初代会長になる。

その他、兵庫県には京都府から河原町系統や府内系統、山陰系統の伝道が試みられ、教会が出来ている。また淡路島へは高安大教会初代会長になる松村吉太郎の弟、松村五三郎が明治25年、吉太郎の命を受け、19歳で淡路島布教に出て現洲本大教会を作った。